

ペン俳句会 句会報（三五十一号）

令和五年十二月七日（木）

兼題『帰り花』、席題『枯』

句会を、十月と同じ場所で開催。出席者は十一名  
（投句十四名）。

浜口 須美子

枯れきつてメタセコイヤも相似形

投げ入れて形決まらず枯尾花

老いの歩の抜きつ抜かれつ帰り花

今ははや拝む形の枯蠅

斧かざし影を大きく枯蠅

新田 ゆふき

百年の紅白饅頭からつ風

収骨の音さやかなり冬紅葉

母葬る名越の坂や帰り花

訃報来て谷戸の暗きに返り花

枯れ菊や猫は垣根を忍び足

大津 そうかい

水噴かぬペリカンの像冬薔薇

城跡の深き枯井戸石路の花

夫婦して捜す補聴器暮早し

夕照や影儚げな帰り花

豪儀なる寄付の話題や年の暮

志村 良知

枯れ菊を踏み敷く猫と睨み合ひ

木枯らしや神々騒く（ぞめく）杉木立

薄暗き數侘助の仄白し

小春日や半世紀経し絵具箱

指す方に薄紅一叢帰り花

首藤 しずを

ひと竿に洗濯物と吊し柿

枯蓮をねぐらと沈む真鯉かな

外つ国の人の絶えざる新嘗祭

青空に薄紅散らし帰り花

影長くぼうずで帰る秋の釣

中村 晃也

風吹く度崩れかけある帰り花

枯木道イブ・モンタンを口ずさむ

根の元に届く夕陽や枯木立

ヴィオロンの窓辺やほのと金木犀

身構えて古武士の風情枯蠅

安藤 晃二

遊覧車もみじで喧嘩の夫婦あり

朱の燃ゆるメタセコイヤや冬の池

逆光や尾花の光り鉄路鳴る

生垣の遙かや紅き帰り花

枯れ薄園の小道具大道具

長尾 進一郎

枯枝の影に怯ゆる夜の道

暖冬や池の魚の眠られず

木枯しの去り枝先のポリ袋

帰り花午後の日差しの中に在り

冬の陽や我が影の伸び道案内

松田 一文子

気温みて暦みにけり狂ひ咲き

犬連れてスマホかざすや狂ひ花

枯菊のかをりかすかや釜たぎり

立冬の上着の要らぬ陽気かな

もみじ手のかしわ手打つや七五三

高橋 由紀子

畑の主刈り残したる返り花

地下道を迷ひ迷ひて冬の空

枯れ芝に直に座りてむすび喰ふ

和ませて見る間に散るや残り花

ラク羅斯の壁打ちの影冬入り日

宮原 凧

一人待つバス停灯し枯れ木星

帰り花戻らぬ人の事をふと

変換のパスワード失せ穴まどひ

空に描く墨絵となりぬ枯木立

夕まぐれ茶室の裏の帰り花

内藤 まりこ

秋澄むや旅の仲間とかるき足

秋の晴寄せては返す波がしら

木枯しや娘の茶髪赤き頬

枯れ枝を灯す柿の実ほつぽつと

帰り花真白きつつじ今日も咲く

森田 元斐

太古より変わらぬ赤や冬暁

寒月や五省に悖る憾みあり

外来の蔓延る野辺に芒立つ

弔いの文に線香と帰り花

枯れ菊の声なき声や処刑跡

西川 知世

日記買ふ笑みあどけなきちひろの絵

住み古りて上るこの坂帰り花

枯葉踏む音を豊かに真弓坂

雪吊に風の素通る夕日影

饅頭にちよんと金箔初時雨

次回は令和六年一月四日（木）、

兼題は季語「風花」（浜口須美子さん出題）、

席題は西川知世さん出題の「羽」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

風花は、晴天にちらつく雪のこと。山本健吉の歳時記は季語の説明が丁寧で文章が美しく、手元に置いてよく開く。以下抜粋―晴天にちらつく雪で、風下の山麓地方に多い。…こういう美しい現象には、音声の効果を大事にしたい。…今日では、俳人たちに最も好まれる冬の季題の一つとなっている。その意味は、もっぱら、遠い山岳地方の風雪によつて、晴天でも山麓の風下地方へ吹き送られてくる雪を指している。美しいイメージがあり、語感も美しいのが愛される理由だろう。―

享和二年の新季寄には、三冬にわたる季語として挙げられ、嘉永元年の季寄新題集には、十月の題目として出ているそう。健吉の基本季語五〇〇選では、晩冬に分類されている。

私は東京に移り住んで、風花を経験した。空つ風が吹く乾いた関東の冬の風情で、故郷を遠く離れたのだなあという感慨を思い出す。

ひねもすの風花淋しからざるや	高浜虚子
風花や波路のはては空青き	水原秋櫻子
炭とりに出て風花の夜も舞へり	富安風生
風花の窓開きなば狂ふべし	三橋鷹女
風花や美しき夜に入らむとす	星野立子
捨て人形風花に眼をひらきある	能村登四郎
鶯の眸のしたたかに澄み風花す	福永鴻司
文脈のあやふきところ風花す	正木ゆづ子
風花や遮断機ひとつの国境	八巻絹子